TURNING POINT

ターニング・ポイント

ボディガード八木薔子

渡辺容子

講談社文庫

講談社文庫

常州大学図書館
藏書章

タンクポート

ドディガード八木薔子（しょうこ）

渡辺容子

講談社

|著者| 渡辺容子　1959年、東京都生まれ。東京女学館短期大学卒業。1992年『売る女、脱ぐ女』で第59回小説現代新人賞を受賞。1996年『左手に告げるなかれ』（講談社）で第42回江戸川乱歩賞を受賞。最新作に『エグゼクティブ・プロテクション』（講談社）。

ターニング・ポイント　ボディガード八木薔子（やぎしょうこ）
渡辺容子（わたなべようこ）
© Yoko Watanabe 2012
2012年5月15日第1刷発行
2012年7月20日第2刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———信毎書籍印刷株式会社
製本———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277258-7

目次

右手に秋風　7
去年の福袋　65
サボテン　109
ターニング・ポイント　189
バックステージ　305
解説　宮川隆行　460

講談社文庫

ターニング・ポイント

ボディガード八木薔子（しょうこ）

渡辺容子

講談社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

目次

右手に秋風　7
去年の福袋　65
サボテン　109
ターニング・ポイント　189
バックステージ　305
解説　宮川隆行　460

ターニング・ポイント

右手に秋風

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

1

八木さん、八木蕎子さん！

食器売り場を巡回していると、通路の前方から仕立てのよい紺の背広に身を包んだ男がかけよってきた。

「そのおでこ、どうしました」

入江貴之はいまにも額の絆創膏に手を伸ばしてきてチチンプイプイと呪文を唱えそうな優しげな表情を浮かべていた。私はリュックを肩に担ぎなおし、ジーンズのポケットに手を突っ込んだ恰好でそんな彼のことを、見上げた。

「虫に刺されただけですから。どうぞご心配なく」

絆創膏の下にあるのは、コンクリートの壁にぶつけて作った擦り傷である。

きのうの夕方のことだ。家電売り場で携帯電話五点、ポータブルCDプレイヤー三点を万引きしたホシを尾行していた私は、男が店を出て駅に通じる歩道を歩きだすのを待ってバン掛けした。

「お客様、何かお忘れ物はございませんか」

いま思うと、色白の優男という風貌に、私は油断していたのだろう。男は見かけか

らは想像つかない怪力を発揮して私を横に突き飛ばし、こちらが追跡しようと立ち上がって足をまえに踏み出したとき、灰色の後ろ姿はすでに雑踏の人ごみに消えていた。

早い話が、きのう私は万引き者を捕捉寸前のところで取り逃がしたのだ。私はだが、あの男が再び、ここギンガ百貨店にあらわれることを確信している。彼らは一度成功すると、二度目に挑戦しようと同じ店に必ずやってくる。験を担いで同じ服装をしてあらわれる、ということと並んで、これは万引き者に共通していえることだ。だから、あの男のことを、着用していたジャンパーの色と素晴らしい脚力に敬意を表して「灰色の稲妻」と命名し、人相ばかりか服装も頭の隅に刻みつけておくことにした。この次はぜったいに逃がさない。

「明日、晩飯に付き合ってくれませんか」

スニーカーの爪先を半回転させ、輸入食器が展示されたコーナーに向かって早足で歩きだすと、入江が追いかけてきていった。

「うまい釜飯を食わせる店があるんですよ」

釜飯は嫌いでない。女を誘うのに気取ってイタ飯とか、発音するのに舌をもつれさせなければならないフランス料理店を挙げたりしない男とわかり、ヨットで焼けたという褐色の顔も、まえほど気障に感じなかった。おおらかな性格の持ち主であること

は、先週、たまたま昼休みに同席した喫茶店で三十分ほど時間を共にしてみてよくわかっている。私より四つ年上の三十五歳。独身、販売企画部部長補佐。ギンガ百貨店自由が丘店の超お値打ち品ともいえる彼を恋人にした女は、「お目が高い」と讃えられることまちがいなしだ。それなのに、私は気がつけば「釜飯は苦手なんです」と抑揚のかけらもない口調で答えていた。仕事中ですから、と可愛げのない一言までご丁寧にもいい添えて。

「ゆっくり話がしたいんだ。あなたをもっと知りたいから」

「私とゆっくり話がしたかったら——」

後ろをついてくる入江を、私は通路の途中で振りむいていった。

「万引きすることですね」

入江貴之の匂いが苦手なのだ。

一階を巡回していて、紳士用オー・デ・コロンが陳列されたコーナーにさしかかったとき、視線を周囲に泳がせながら、私は内心で考えた。彼がワイシャツの襟元に漂わせた匂いは、七年も交際しながら昨年の九月に別れた男とまったく同じものだった。あの匂いのせいで、私は入江に微笑みかけたくとも逆に頬がこわばり、いつも唇をへの字に歪めてしまう。

保安士に転職してそろそろ一年になる。

デパート、スーパーなど派遣される先々で巡回中、紳士用の整髪料やオー・デ・コロンが並べられたコーナーにさしかかると、いつも私は早足になり、ろくに目も配らず通りこしていた。最近は、店内のあちこちに据え付けられた鏡をつかって背後を窺うことにも慣れ、鏡ごしに不審者を発見することは日常となりつつあった。「ホシ」「バン掛け」といった保安士の用語にも抵抗はなくなった。が、コロンの匂いが漂うコーナーは別だ。

きょうもそこを足早に通りこし、婦人雑貨の売り場がひしめく界隈にむかって通路を進んでいくと、スピーカーから流れていたＢＧＭが、雨が降り始めたことを従業員に告げる音楽に切りかわった。

イージーリスニングの何気ない曲が、興味深い光景を目撃した私の耳には、ベートーベンの「運命」に匹敵する強烈な響きとして飛び込んできた。

「これをいただくわ」

主婦とおぼしい五十がらみの客が指さしたのは、青いベネチアングラスのネックレスだった。にもかかわらず、客から代金を預かりレジカウンターへ向かおうとする女性販売員は、客が指さした青いそれの他に、もう一点、ショーケースの上から風鈴を彷彿させる丸いガラス玉を連ねた紫色のネックレスを携えていた。その紫色のネックレスに、私は視線を吸い寄せられていた。レジに持っていく商品は、この場合、客が

購入を希望した一点でよいはずだった。なのに、女性販売員はその手にネックレスを二点握りしめている。

白ネズミかもしれない。

レジカウンターに到達するまでに、女性販売員はおそらく二十歩ちかく歩いた。一方、私は柱のかげまで六歩しか歩いていなかった。最短距離を瞬時にして選択すれば、こうして先回りするのも可能になる。これは店内で万引き者を尾行・監視するときに必要な技術だった。

だが私は今、客の万引きを警戒しているのではない。柱のかげに置かれてあったワゴンの中からとりあげたスカーフを吟味するふりをしながら、視線はレジカウンターに入っていった女性販売員に固定させていた。

水原美奈子。胸につけたネームバッジが、名前を教えてくれた。きりりと引き締まった唇に塗ったショッキングピンクの口紅が、色白の肌を際立たせていた。年齢は二十五、六といったところか。長い髪を背中にたらしたヘアスタイルは私とよく似ているが、彼女は前髪を脱色していた。

デパートの接客、販売活動は、デパート側の正社員、メーカーから派遣された販売員、マネキンの三種類の人間が分担して行っている。水原美奈子が正社員であることは黒いワンピースの制服から明らかだった。

レジカウンターに入った彼女は、別のアクセサリーショップの派遣社員と入れ代わりにレジスターにむきあい、慣れた手つきでボタンを弾きはじめた。私はじっと目を凝らし、監視をつづけた。彼女のことはきのうから妙に気になっていた。巡回中、彼女のいる売り場の付近を歩いているとき、私たちの視線は頻繁に交錯した。ついさっき社員食堂でも、昼食をとりながら背中に視線を感じて振り返ると、彼女が私を見つめているのだった。私の存在を疎ましく思う気持ちを滲ませたあの目つきは、二時間が経過したからといって忘れられるものではなかった。

¥３２０００

レジスターのディスプレイにあらわれた数字は、青いネックレスの値段だ。

水原美奈子は機械に向き合ったまま、手にしたもう一点のネックレスの値段を見ながら、再度ボタンを弾いた。

¥２８０００

ディスプレイに横並びの数字となって出てきたのは、紫色のネックレスの値段と思われた。私は瞼をこじあけ、瞳に全神経を集中させる。今この瞬間、私はまばたく自由を放棄していた。

¥００００００

くしゃみひとつしていたら、ディスプレイに浮かんだゼロを見落としたろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor